

# 月刊ウィーン

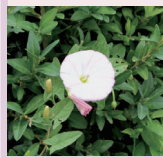
Monatsmagazin Japanisch  
現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊平成元年 創刊29年目 **Nr. 336**

## GEKKAN-WIEN 2017年7&8月号





# 杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 69



昨年三月まで筆者が勤めた京大原子核工学専攻では、学生と教職員間の親睦を図るため、大卒創立記念日の六月十八日に研究室対抗のソフトボール大会を開催していた。筆者が学生の頃の昭和五十年代は軟式野球大会を開催していたが、その後長らく中断していた。平成四年四月に筆者が専攻長を拝命した最初の仕事が六月にソフトボール大会として復活させることだった。修士修了や学士卒業時の研究発表会は大きなイベントではあるが、その年に該当する学生が中心となる。一方、ソフトボール大会は、回生から四回生、大学院生、教職員と各員が参加できるので、幅広い世代が堂に全する貴重機会となっている。梅雨時ではあるが、昨年までの五回とも雨に遭っていない。



六回目の本年は六月十八日が日曜日のため前日の十七日に開催された。OBも招待され、別用も兼ねて参加することとした。この日も朝から好天に恵まれ、御所の富小路ランドに六チーム、約七〇人が集まった。朝九時、村上専攻長の開会挨拶の後、グループ三チーム毎にリーグ戦が開始された。午後からは各校グループ対抗による決勝トーナメントが行われ、神野研究室が初優勝を飾った。筆者が所属した功刀研究室は、名誉四番の筆者が七打数二安打二打点四球ながら好機に打てず、最下位を逃れるのが精一杯だった。三塁を守りライナーをジャンプ二番好捕したのが唯一の見せ場だった。その後、吉田キャンパスの教養懇親会が開催された。試合の合間にも進学や就職の話があったが、ゆつくり話が出来て盛り上がった。年々参加者が増え、学生教職員、OB間の連携が強まっているのは中興の祖として嬉しい。来年は会社関係のOBにも広く声を掛けようとの話になった。楽しくも有意義な初夏の二日だった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の歴史的な病払いについて述べてみたい。シュテファン寺院から西に延びている美しいグラートン通りの真ん中にベスト記念柱があり、三柱二体記念柱とも呼ばれている。欧州各地に猛威をふるったペストが二六七九年にウィーンも襲い、十万人とも言われる犠牲者が出た。マリア・テレジアの祖父である皇帝レオポルド二世がペストの終結を記念し、また神のご加護に感謝の意を込めて献じたのがこの塔である。当時は暫定的に木で作られた記念柱だったが、その後大理石にするプランが出され、二九三年に現在の姿になった。レオポルド一世がひざまずき神に敬意と感謝を表している。記念柱の最上部に見られる神様、イェス・キリスト、鳩の三つは父

子・精霊の三位一体を示している。一方、京都の祇園祭りは八坂神社の祭礼で、古くは祇園御雲云(こりよう云)と呼ばれ、貞観十一(八六九)年に京の都をはじめ日本各地に疫病が流行した時、平安京の広大な庭園であった神泉苑に当時の国の数にちなんで六六本の鉾を立て、祇園の神を祀り、さらに神輿を送って災厄の除去を祈ったことにはじまる。七月二日の吉付人にはじまり、三日の疫神辻夏越祭で幕を閉じるまで、一ヶ月にわたって各種の神事・行事がくり広げられる。祇園祭は平成二年にユネスコの無形文化遺産に登録された。祭のハイライトは七日と四日に行われる山鉾巡行である。山鉾巡行の前夜祭ともいえる二日と三日のイベントが宵山。夜は山鉾に提灯が幾十となく点火され、祇園囃子がぎやかに奏でられ、夜店なども盛り気が盛り上がる。両市の疫病封じの祈りが今日も続いている。



余談であるが、筆者がウィーン赴任中、ベスト記念柱の前は数え切れないほど通った。京大回生時にはアイスホッケー部員のアルバイトとして山鉾巡行で船鉾を引いた。四条河原町での辻回し時に、階の棧敷席でNHKアナウンサーの宮田輝氏が美しい舞妓さんと並んで観ていたことを覚えていた。宵山にも何回か訪れ祭り気分を楽しんだ。両市の歴史的な疫病封じを紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部に掲載をお願いしたベスト記念柱の写真を掲載させていただきます。

■杉本純 東工大特任教授 前京大教授 元原子力機構ウィーン事務所長 ■